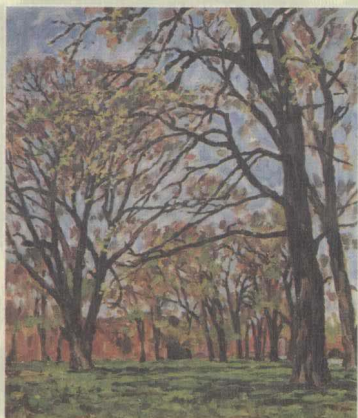


北大恵迪寮の 男たち

けい
てき

— 60年安保から三十年 —

向井承子



新潮社

— 60年安保から三十年 —
北大恵迪寮の男たち

向井承子

ほくだいけいてきりょう おとこ
北大憲迪寮の男たち

— 60年安保から三十年 —
あんほ さんじゅうなん

一九九一年七月五日 発行
一九九一年八月二〇日 三刷

著者 向井承子
むかいしょうこ

発行者 佐藤亮一
さとうりやういち

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話(業務部) 03-3266-5111

(編集部) 03-3266-5411

振替 東京四一八〇八

印刷 凸版印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。



© Shōko Mukai 1991,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-353602-0 C0095

北大恵迪寮の男たち ● 目次

プロローグ——都ぞ弥生 7

共産主義から市民主義者へ 17

イワナを愛してしまった少年 44

手術をやめた外科医の生き方 68

鉦山から地底監視人へ 96

日教組の大勢に抗う教師の煩惱 115

海の男が陸に上がった時 138

現代における和裁士の意味 161

夜のオアシスを演出する男 182

都会人の心よ体よ平安なれ 201

金融ビジネスマンと般若心経 220

花形経済記者の反省録 240

会社人間になれなかったTVマン 269

エピソード——北の大地から 300

装画 富樫正雄

「芽ぶきの楡」(北大構内)

北大恵迪寮の男たち

—— 60年安保から三十年

プロローグ——都ぞ弥生

一九八八年（昭和六十三年）真夏。特別暑い夏だったと記憶している。

その年の春から初夏にかけて、私は久々に体調を崩していた。なかなか微熱がとれず、しつこい咳につきまとわれ、なにをするのもけだるかった。

その前後は、いまから思い出しても、ひどい時期だった。同居の父が八十七歳にもなってからの癌で亡くなり、そのせいか、老母の体調も極端に悪くなっていた。いつかはわが身にもやってくる老いと死なのだが、四六時中目の当たりにしていると、つい愚痴も出てくる。知人たちの中には、なぐさめてくれるつもりだろうが、「デス・エデュケーション（死の準備教育）」の絶好の機会だわよ、などとわけ知り顔にいうものもいた。が、マスコミ好みのアメリカ直輸入語は私をさかなでするだけである。冗談じゃないわ。物心ついたら戦争中、医者も薬もない、どうする術もなく肉親が死に吸い取られていく光景をみながら育ったのよ。核家族、家族崩壊のアメリカとは対極にいる私じゃないの——。疲労感ほ溜まる一方だった。

そのうちに、梅雨がやってきた。濃紫や薄桃色の紫陽花がねずみ色の大気の中にしっとり鮮やかな花弁を開いているのが眼に染みた。花の美しさに気づくなんて久々だった。どうやら半年近く、私はけだるい倦怠に沈みこんでいたのである。

梅雨が明けると、焼けつくような暑さがやって来た。

仕事は容赦なく溜まりこんでいた。私は半ば強引に机に向かい、書き下ろし中の原稿用紙を前にするのだが、気力がどこかに吸い込まれてしまったみたい、エネルギーを集中するのに一苦労だった。そんな回復力の乏しさは、ふと、一月に誕生日を済ませたばかりの五十歳という年齢を意識させるのだった。ひょっとして、これは恐れていた更年期という奴なのだろうか。私はますます減入り、しかし酷暑に耐え、乱雑に散らした本と紙の間にうずくまるように、原稿用紙に向かっていた。

昼下がり。机の上の電話がなった。受話器をとる。どこことなく惘然とした、しかし、いつも律儀であることは間違いない、朝日新聞記者の長沼石根いねの声が伝わってきた。

「暑いですねえ。お元氣ですか」

「いやねえ。北海道育ちは夏は苦手だわ。実は私、ちょっと体調崩してるのよ。でも、仕事はしてるわよ。やらなきゃ、やらなきゃって頭だけが前に行って、実態はさっぱりだけど」

古い友人である長沼には、ことばも気楽である。若いころ、仕事を通して出会ってからも二十年が過ぎた。生涯一捕手と称された野球選手、野村克也を描いたノンフィクション『月見草の唄』や『地方政治家』などの著書を持つ。肥後もっこすという表現は知っているが、信州人のそれはなんとこのだろう。長沼の筆は、「それぞれの風土」、言いかえれば人と地域というもののへの地道なこだわりの筆だとかねがね私は思ってきた。そんな彼と二十年前に自己紹介しあって、長沼は私には北海道大学の一年後輩にあたることを知った。

私自身は学閥などにはほとんど関心がなかった。関心がないというのは正しくないかもしれない。だいたい、男女共学といっても女子学生などいないに等しかった当時の四年制大学と、女子に門戸を開放していなかった当時の職場事情では、学閥なんて作ろうにも作りようもなかった。否定するものがあつての学閥否定ではなく、要するにそんな世界から外されていたのである。長沼の

方も、反発はしてもそれに乗じようなどはない、いわば偏屈もの同士だったのだが、私に関しては、あえて先輩後輩関係を強調する場面があった。

一九七〇年（昭和四十五年）ごろ、フリーライターのかけ出しだった私は、まだ有楽町にあった当時の朝日新聞の古い社屋の廊下を走り回っていたことがあった。少し年下のビートルズ世代を真似て、Gパンに綿シャツかなんかで、若さを決めたつもりで三十代だった。それが、運悪く長沼にばったり出会ったりすると、彼は聞こえよがしに「やあ、先輩」と大声を出し、朝日の若い知人たちは、「へえ、長沼氏より先輩だったんですか」とにやにやする。私は私で、「いやだなあ。そんなこと言わないでよ」と、大袈裟に眉をしかめてみせる。いまよりもずっと若くて、そんな冗談を言い合った時代が確かにあったのである。

しかし、このごろでは、「暑いですねえ」と、長沼に時候見舞いの電話をもらったりすると、ほんとに互いに体調を気づかい合うような気分になるのだった。このところ、共通の友人がぼつぼつとこの世から姿を消して、弔いの場で出会ったりすることが重なったせいもある。「先輩」と呼ばれても、「女の方が平均でいくと長生きだもんねえ。からだだけは気をつけてね」などと、思わずエールを送ったりしてしまう。同世代、同窓のよしみも、ほとんどいたわりになつたらおしまいね、などと軽口を叩いては、ちよつとずつ押し寄せる人生後半期への翳りのような思いを無理やりに笑いの中に閉じ込めようとする会話に、自然に変化してきているのである。

「実はねえ」と長沼は口火を切った。

「ぼくの同期生、といつても北大の恵迪寮時代の友人ですが、地域医療に情熱を燃やしている宝住^{たからすゐ}一という男がいるのです。以前からご紹介しようと思つていたんですが、彼はいま宇都宮市の医師会の幹部をしていましてね、患者の立場にある人の率直な声を聞きたい、と相談してきたのですよ」と、用件を丁寧の説明し始めた。

恵迪寮とは、懐かしい名であつた。いまでは、広がった都会に囲まれてしまったが、私が入学した、一九五七年（昭和三十三年）当時には、まだ北海道大学は札幌市の北西のはずれにあつた。北には地平の彼方まで石狩平野が茫々と広がり、西を見れば、地平の彼方に盛り上がるのは手稲連峰だつた。北大の敷地は北西部に広大な農場があつて、農場の切れたあたり、まさに原野に包まれた風情で、古色蒼然とした、というよりも、私には荒れ果て薄汚れた廢屋のように感じられた男子寮があつた。

寮の住人と、自宅通学の私の接点はほとんどなかつた。寮生といへば、時折、キャンパスで氣勢をあげている集団、それも他の世界にはさっぱり通じない、そこだけの価値観に依つた奇妙な生活をしている野蛮を信条とする連中……といった印象が強かつた。

だが、夜のキャンパスにファイアー・ストームを焚き、寮生たちが狼の遠吠えにも似た伝統の歌唱方法で恍惚とうたう「都ぞ弥生」など寮歌の美しさを聞いている時には、この世ならぬ彼らの風情が、連綿と受け継いできた非日常的な形容しがたいなにかを感じないわけにはいかなかった。炎にわずかの輪郭を浮き出させた男たちが輪になつて肩を組む。まるで地底から湧き出す壮大な読経のような唸り声は、炎とともに空に舞い上がり、楡の巨木の梢を超えて、宇宙の彼方へと漂っていく。

寒月懸れる針葉樹林　櫓の音凍りて物皆寒く

野もせに乱るる清白の雪　沈黙の暁霏々として舞ふ

ああその朔風飄々として　荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ

……

（「都ぞ弥生」明治四十五年寮歌三番より）

寮歌というと、自然への憧憬と畏怖がほとんどの内容だつたと思ひ出す。かつて、有島武郎が、

新渡戸^{にとべ}稻造がうたい、内村鑑三もうたった。内村が彼の哲学において、最大の教師とした大自然を生きるモチーフとし続けた伝統が感じられるものだった。

しかし、そのころの私には、本州から来た学生たちの、熱狂的な北への憧憬やロマンには、どこかしらじらと醒めた感覚もあった。とにかく、大自然は人間に寛容なロマンチックな存在などではなかったのである。朝起きれば、戸口も開かないほどの雪に閉じ込められる日もあり、雪かきや煙突掃除は子どもの仕事であった。大雪の日など、煙突が詰まっているところに雪が吹き込んでいると、ストーブの火つきは悪く、凍えそうな室内をあたためるには、煙突を外して、屋外に運び出し、竹を割いた長い柄つきのタワシのような道具で、煤^{すす}をかき出さなければならず、泣き出したくなったものである。それに、戦争の痛手から立ち直れないままの父に連れられていた私たちは、いつも、部屋をあたためる燃料の心配をしなければならなかった。火がなければ、ふとんにもぐるしかないくらしで、首を出せば襟元に吹雪がうっすらと積まることもあった。マツチ売りの少女の凍えた手足の感覚にも思いを馳せられる、凍死につながりかねない寒さへの恐怖があった。

戦後、食料を得るのに、開墾した泥炭地の凄まじい雑草の生命力は、人が自然と調和して生きるなど、それ恐ろしい傲慢としか思えないほどの、自然への恐怖を染み込ませてくれた。自然保護を強調しなければならぬ現在でも、私はどこかで、自然の報復の力を信じている。悠久の自然は、人類の生存などという短期的な目的を超えた凄まじい報復をいまに行なうのではないだろうか、と。

しらじらとした思いを心に抱きながらも、寮歌には確かに心を揺さぶるものがあつた。炎に映える男たちの恍惚の表情から響き出す、あまりにも美しい歌詞を聞きながら、私は北国育ちの自分が、現実的に過ぎる眼で自然を感じているのを薄々と知らされていた。そういえば、早春、雪

をかき分けるともう黄色い小花をふくらませている福寿草に胸をときめかせている。銀色の猫柳の花穂や落のとうにいのちのいぶきを感じていうちに、カッコウの声を聞き、むせるような新緑と花の饗宴に包まれている。巡る自然が、凍えていた肉体をも溶かしていく感覚を堪能しながら育ってきた私ではなかったか。体内に自ら仕組まれている自然の感性への呼び掛けのような、読経のような荘厳な歌は、キャンパスを巡り、市内に繰り出し、静寂にありったけの青春のエネルギーをぶつけながら四季折々に途絶えることがなかったのを思い出す。

「へえ、長沼さんって恵迪寮だったの。いままで全然知らなかったわ」

「それで、用件というのはですね。一度、宝住がお会いしたいというのです。会って損にならない男ですよ。今週、彼が出てきますので、ご紹介できればありがたいのです」

私は、了解した。からだはしゃんとしていなかったけれども、医者に言いたいことは山ほど溜まっていた。もとはといえば、医療とは病むもののための技術のほずである。いつからか、そんな原点があべこべになり、患者が医者にこびなければ治療も受けないような習慣が定着している。そんな、いわば患者の率直な声を専門家を任じる人に聞いてもらえるだけでもいいと思った。

約束の日の夜七時。私は長沼に案内されて、新宿の歌舞伎町を歩いていた。真夏の遅い日暮れを待つ歓楽街に、昼あんどんのようなネオンが灯り始め、濃い化粧の女たちが、外国人らしいなまりで、夕映えに照らされながら客をひいていた。

長沼は、下品な町並みの一角にはどこか不釣りあいな、イタリア風の奇妙な建物に私を連れ込んだ。どこも同じ、極彩色のネオンを満艦飾に貼りつけて輝くビルのエレベーターのボタンを押した。若ものたちでぎゅうづめになりながら、四階でエレベーターを降りると、眼の前が宝住と

会う予定の韓国風居酒屋「ばらんせ」だった。

ドアを開けると、店の奥に、中年の男たちが大声で話し合い笑っている声が聞こえてきた。その一団の遠慮会釈のないトーンは、明らかに他の客たちの雰囲気とは外れていて、あえて表現すれば、中年らしいたずまいとはおよそ外れた、高校生の集団の馬鹿騒ぎに近いとも言えそうだった。長沼は、こともあろうに、私をその集団の真只中へ連れ込んだ。

「宝住さんとお会いするんじゃないかったかしら」

私は、戸惑いとも困惑ともつかないことばを長沼につぶやいていた。と、男たちの集団の中から、その中でも特別に轟きわたる重低音の声の持ち主が、声に似合わぬ小柄なからだに、まるで子どもみたいにいたずらっぽい眼をくりくりとさせながら立ち上がり、「やあ、承子ちゃん。しばらくです」と語りかけてきた。一度だけ、同窓会で出会い、長沼の友人として紹介されていたテレビ朝日のディレクター、石川舜であった。

「あ、石川さんじゃない。そういえば、石川さんも恵迪寮って聞いたことあったわ。でも、どうしてここにいるの。それに、こんなに沢山……。皆さんは、どういう方たちですか」

石川は楽しそうに説明を始めた。

「いやいや、どうも賑やかなことですみません。みんな、恵迪の友人ですよ。きょうは栃木から久々に宝住が出てくるというので、急遽号令をかけましてね。こうやって、なにかあると、いつもみんな集まっちゃうんですよ。それに、今日は、承子ちゃんも来て下さると聞きました……。なにしろ、同期のメツチェンですからね」

来て下さる、なんて言われても……。私は、なんとも奇妙な集団にどう対応したらいいか、わけがわからなくなっていた。

五十を過ぎて、ドイツ語覚えたての学生そのままのメツチェン（娘を意味する Mädchen をもじ

った学生ことば）呼ばわりは悪ふざけとしても、承子ちゃんといわれるのも奇妙だったし、なんで突然、恵迪寮の同窓会にメッチェンとして参加することになってしまったのか私にはわけがわからなかった。

律儀な長沼にしてもことは思わぬ展開だったらしく、彼は彼で、異様な集団に保護色のごとく溶け込んでいた宝住医師を探し出すと、「向井さん、彼が宝住です。地域医療には一言持つていまして、また、最近では、大学の高度医療が中心の医療に対抗して地域の現場で医療にたずさわる医師たちによる臨床整形医科学会を発足させたり、独自の活動をしている男です」と生真面目に紹介するのだった。

きょうの私の目的は、この医師となにか話をすることにあった。私はハンドバッグから名刺を出し、宝住医師と名刺の交換を型どおり行なった。しかし、型どおりはそこまでだった。宝住はまるでエンジン全開のスポーツカーのように早口でしゃべり出し、あまりの早さとまわりの騒音のため、何をいつているのかつかみかねているうちに、他の男たちが会話に雪崩れこんできて、気がつくハンドバッグには男たちの名刺が溜まりこんでいた。

この時が、まるでアメーバのごとく瞬時に一体化してしまう不思議な集団との初めての出会いだった。それぞれが、熟年の仕事人たちであり、それぞれに異質の社会に生き、その社会の責任を全うしなければならない立場の男たちであり、たぶん、その場ではひとかどの顔を見せているはずなのに――。私には、幼稚園児の集団さながらの大騒ぎは理解を超えた不思議なものであった。しかも、それが稚氣まるだしであればあるほど、現実からすると時空間を移動する、一種の祭りの恍惚にも似た非日常の時間を感じるのだった。どうして彼らは、かくも日常離れのした青春の残照にこだわるのか、と幾度も考えさせられた。熟年の男たちの集まりの散会の時は必ず、